

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)  
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル: Association between maternal bonding difficulty and neurodevelopmental delay in children aged 2 to 4 years: the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル: 母親のボンディング障害と2~4歳児の神経発達の違いとの関連および性差: エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 福島ユニットセンター  
サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Journal of Developmental Origins of Health and Disease

2026年: DOI: 10.1017/S2040174426100476

筆頭著者名: 西郡俊絵  
所属 UC 名: 福島ユニットセンター

目的:

母親のボンディング障害と、子どもの神経発達の違いとの関連および性差について検討することを目的としました。

方法:

母親の産後1年時のボンディング障害は、赤ちゃんへの気持ち質問票(Mother-to-Infant Bonding Scale: MIBS)を用いて評価しました。子どもの神経発達(2, 3, 4歳時)は Ages and Stages Questionnaires Third Edition (ASQ-3)を用いて評価しました。母親のボンディング障害(MIBS)と心理的ストレス(K6)の組み合わせにより群分けを行い、参照群(MIBS≤4かつK6≤4)を設定した多変量ロジスティック回帰分析を男女別に実施しました。多数の母親および子どもの背景要因を調整し、多重検定補正を行いました。

結果:

男児では、心理的ストレスを伴わない母親のボンディング障害は、2~4歳において、ASQ-3の全5項目(コミュニケーション、粗大運動、微細運動、問題解決、個人・社会性)の発達の遅れと有意に関連していました。一方、女児では、4歳時において、コミュニケーション、粗大運動、微細運動、個人・社会性の発達遅れとは有意な関連が認められましたが、問題解決の発達遅れとの有意な関連は認められませんでした。

考察(研究の限界を含める):

母親のボンディング障害は、子どもの神経発達の違いと関連することがこれまでに報告されていますが、性差に着目して検討した研究は国際的にも限られています。本研究では問題解決の発達への影響については、性差がみられることが示唆されました。一方、本研究の限界として、母親のボンディング障害および子どもの発達の評価が自己記入式質問票によるスクリーニングであり、臨床診断ではない点が挙げられます。また、母親の心理的状態やボンディング障害は医学的に診断されたものではなく、評価時期が産後1年であることから、早期産後の状態を十分に反映していない可能性があります。

結論:

母親の産後1年時のボンディング障害は、男女ともに、4歳時でのコミュニケーション、粗大運動、微細運動、個人・社会性の発達遅れと関連していました。子どもの問題解決の発達については、男児では4歳時で発達遅れと関連していましたが、女児では有意な関連は認められませんでした。